

マルクス経済学の課題*

——『マルクス経済学方法論』の「はじめに」

小幡 道昭

2015年5月30日

「経済学の課題は、資本主義について何をあきらかにすることか。」という質問については、「歴史を理論的に解明する」ことだということたちで、お答えしておきます。ただ、その意味は簡単ではなく、その点については、「第1幕、第2幕、第3幕」について、少し補足いたします。

はじめに

20世紀末以降、資本主義は世紀の大変貌をとげつつある。第二次大戦後の世界を覆ってきた冷戦体制が瓦解し、次いで新自由主義も敢えなく挫折するなかで、中国、インド、ブラジルといった新興資本主義の台頭が進展したのである。ひろくグローバリズムとよばれるこの地殻変動は、私が学び泥んできた戦後日本のマルクス経済学の目には、どこか捉えにくい面立ちに映る。ここ十年あまり、その不可解さを原理論のなかに読み解こうと、資本主義の変容原理を日々追い求めては、思いあぐね夜ごと方法論的な夢に誘われてきた。本書は、こうした夢の途中でものしてきた論考を編んだものである。

それにしても、資本主義の新たな変貌を理解しようとすると、知らず知らずに方法論へと足が向いてしまうのはなぜなのか。個人的資質の問題だといわれればそれまでだが、そこにはマルクス経済学の根本に直結する何か埋め込まれていることもたしかである。ここでマルクス経済学とよんでいるのは、今日の支配的な社会をある時代に起源をもつ歴史上の一社会と捉え、この資本主義の発展を理論的に解明しようとする経済学のことである。むろん、マルクス経済学の定義は千差万別、人によってこれでは広すぎるようにも狭すぎるようにも思われるであろう。ただ少なくとも私が戦後日本の大学で親しんできたマルクス経済学は、こうした類の“歴史を理論的に解明する”経済学であった。

とはいえ、歴史と理論はそう簡単に結びつくものではない。私自身、“歴史を理論的に解明する”と公言するのに、いまでも何かしらのためらいを覚える。もし、資本主義の発展過程を捉えたいのなら、まず、埋もれた史実を発掘し、現実が生じている事実に目を凝らし、観察された現象を正確に記述整理し、類似した現象と比較対照することで発展の特徴を概括し、時代的な区分を設定するといった、歴史学のアプローチこそ相応しいのではないか。たしかに、実証を学是とする近年の経済史研究は、

理論をベースにした一般的な説明に合致しない史実を山のように積んでみせる。ところが、では資本主義の歴史的發展をどう捉えるのか、冷戦構造はなぜ崩壊したのか、グローバリズムは何を意味するか、といった問題には何も答えてくれないのである。

他方逆に、姿かたちを大きく変えてゆく歴史的現象に対して、演繹的に構成された自然科学の理論を適用しようとするれば、困難にぶつかるとも目に見えている。もともとそうした理論は、対象の基本構造が不変であることを前提に、同じ現象の再現性や定量的な変化の法則を究明するためのものだった。自然科学の方法をそのまま援用してきた理論経済は、歴史的に相貌を変える対象を前に、繰り返し“経済学の危機”を訴え、その揚げ句にお世辞にも新しいとはいいいにくいニュー・モデルを量産してきた。数理モデルを科学の理念とする立場からは、“歴史を理論的に解明する”などというのは、およそ理論の風上にも風下にもおけぬ存在となる。こうして、歴史理論としての戦後のマルクス経済学は、経済史と経済理論に挟撃され、いまや絶滅の危機に瀕している。

だが、マルクス経済学が追求してきた課題が消えてなくなっただけではない。今日のような歴史の大きな転換点では、その歴史の意味をどう理解するか、さまざまなかたちで人々の関心を集める。こうした場では、あれほど厳密な実証性を誇った歴史家も精密なモデルを構築した理論家も、味気のない在り来たりの発言を繰り返すことになる。それは、“歴史を理論的に解明する”とお題目を唱えるだけで、その内容を批判的に深化させることを怠ってきた通俗的なマルクス経済学者と変わるところがない。求められているのは、こうした漠然とした関心に学問的な内容を与える方法なのである。それは一方で、変容の契機をいかに理論化するのか、理論の内部に固有の「展開方法」と要請すると同時に、他方で、その理論で現実の歴史的現象にいか接近するのか、という「適用方法」を必要とする。歴史的發展の理論的解明を中心課題に掲げてきたマルクス経済学にとって、方法論の革新が決定的な意味をもつ理由はここにある。

* 世界資本主義フォーラム：於立正大学

ところで、このようにいわば水と油を混ぜようとする
が如き難題をその核心に抱え込んだマルクス経済学は、
それ自身また、実は歴史的な産物であった。それは、後
になってやっとその意味がわかる蟬脱の結果、生まれた
とてよい。その限りで戦後日本のマルクス経済学は
「マルクスの経済学」と同じものではないのである。その
屈折した履歴を振り返っておくことは、本書でこれから
答えようとしている問題の真相を知るうえできっと手が
かりになるだろう。

理論なるものの特質を多少とも意識すれば、“歴史を
理論的に解明する”などということが、歴史的な諸社会
全般に対して一様に許されることではないことはすぐに
わかる。理論的アプローチは資本主義という特殊歴史
的な社会を対象にすることではじめて可能になる。言い換
えれば、対象の特殊性が理論的アプローチを要請するの
である。この関係を明確にしたのは、K. マルクス (1818-
1883) だった。マルクスは、人類史全般を対象にいわゆる
唯物史観を描いてみせたが、その主著たる『資本論』の
考察対象は「資本主義的生産様式」に絞り込まれている。
すなわち、理論の対象は限定されているのである。この
限定を明確にした点で、「マルクスの経済学」はマルクス
経済学の始点を与えられたのである。しかし、これはま
だ第一幕にすぎなかった。

第二幕は、マルクスの歿後にはじまる。もとよりマル
クス自らがマルクス経済学と称するはずもなく、この呼
称は「マルクスの経済学」から方法論的に脱皮すること
で、はじめて誕生したのである。『資本論』第1巻が刊
行されたのは、1867年のこと、それはドイツの読者を
対象にドイツ語で執筆されたのであり、英語版がでたのは
1887年のことである。その舞台とされたのは、亡命先の
ロンドンで眼前にした19世紀中頃のイギリス資本主義
であるが、マルクスはこの現実こそドイツの将来のすが
たであり、その発展は自らの内に矛盾を累積させて、や
がて別の社会に転じざるをえないことを、まずもってド
イツの読者に伝えたかったのであろう。

ところが、ドイツ資本主義の歴史的発展は必ずしもイ
ギリスと同じ軌道をたどることはならなかった。ドイ
ツ語の読者にとって、この乖離は決定的な意味をもった。
マルクス歿後のマルクス主義者は、「金融資本」や「独占
資本」、「資本輸出」や「帝国主義」といった新たな現象
を、『資本論』に内包された原理で読み解こうとした。こ
の結果、資本主義から別の社会への転換とは区別される、
資本主義の自己変容に焦点があてられ、資本主義の新た
な発展段階が問題として浮上ることになったのである。
理論の対象を資本主義に絞るだけでなく、説明すべき内
容を資本主義の段階的変容に設定することが、20世紀の
マルクス経済学への跳躍台となった。

さらに第三幕がつづく。この新たなマルクス経済学は、
第1次世界大戦後、主としてドイツ経由で日本に導入さ
れた。そこでは、ドイツの場合とは異なり、マルクスの視

野にほとんどまったく入っていなかった、極東における
資本主義化が進展していたのである。日本の現実には『資
本論』の描きだす世界と瓜二つのようにもみえ、また大
きく掛け離れているようにみえる。だが『資本論』のど
こを探しても、日本資本主義への論及など影も形もない。
似ているようで似ていない、似ていないようで似ている、
しかも『資本論』の内部にいかなる示唆も見いだせない、
この状況が若い日本のマルクス経済学者たちを刺激した
であろうことは想像に難くない。こうして、『資本論』の
ような「理論」を、新たな資本主義の「現実」の解明にど
のように適用すべきか、という方法の問題を、絶えず意
識的に追求せざるをえない土壌が生みだされていったの
である。

日本資本主義の歴史的な性格をめぐる論争を媒介に独自
の深化を遂げたマルクス経済学は、第2次世界大戦に至
る過程で厳しい弾圧に晒された後、戦後一気に復活し、
アカデミズムの世界に定着していった。ここでも、近隣
アジア諸国の発展を徹底的に抑圧し植民地化することで、
辛うじて資本主義の途を歩みえた戦前と異なる、日本資
本主義の新たな相貌が論争の的となった。対米従属とい
うかたちで合衆国の強力な軍事力に依存しながら、急速
な復興から高度成長への道を突き進む日本資本主義の二
重性が焦点となり、日本は資本主義か否かをめぐる戦前
の論争は、従属性と自立性をめぐる論争に転化した。

本書の直接の対象は、こうした戦後日本のマルクス経
済学のなかで、特異な方法論を展開した宇野弘蔵 (1897-
1977) とその影響を受けた人々の議論に絞られる。明ら
かに狭く限られた範囲を扱うことになるが、そうしたの
は、この流れのうちに、いま述べたマルクス経済学の方
法論の問題が濃縮されており、そして、私自身が40年以
上ずっとこのなかに身を沈めて研究を続けてきたからで
ある。およそ方法論というものは、外から眺めて批評し
てみても役にたつものではない。マルクス経済学にもい
くつかの異なるスタンスがあり、それぞれ独自の方法論
を具えている。しかし、そうしたものを網羅し折衷して
も意味がないことはわかりきっている。それぞれの方法
論は、資本主義の歴史的発展を実地に解明する行為と一
体をなすことで意味をもつ。はじめに正しい方法があっ
て、それに従えば正しい答えがでてくるというものでは
ない。方法論はいわばスポーツにおけるフォームのよう
なもので、自らの身体活動に対する内的な知覚を通じて
マスターするほかない。ただどうしてもスランプから抜
けだせないようなら、ある段階でフォームそのものを自
覚的に改造してみる意味はある。そして、グローバリズ
ムの現実を見つめるなかで、私自身知らず知らず、身に染
みついたアプローチを見直さざるを得ないような気がし
てきたのである。その意味で本書は自己批判の書といっ
てもよいが、それは同時に、すでに述べたように、マル
クス経済学の根本に真っ直ぐに通じる一般性を具えてい
るはずである。